

大造り物が出来るまで①

構想～小屋掛け

6月頃になると、どんな材料で何を作るかなど「題材」を決めるための制作会議が各連合組で開かれます。世相を風刺することなどが条件なので、大造り物に込めるタイトル(表題)決めも悩ましいところ。構想がまとまると制作責任者は資料や写真を集めたり、自分で下絵を描いたりして大まかなイメージを作ります。それから約1か月後、大造り物を制作する“小屋”と呼ばれる作業場が連合組ごとに建てられ、大造り物の制作状況が外から見えないようにブルーシートで覆います。



矢部小学校の作業小屋は雨よけ対策万全。



この部分は何を使って作るのか…。



作業がしやすいように橋が渡されています。



安全対策が随所に。



既存の倉庫を利用して作業場になっている組もあります。



矢部高校のみなさん。今日から頑張ります！



夜間の作業では照明を付けて行われます。



構想の下絵。



こちらは3階建ての小屋。大物ができる予感。



採ってきた材料を加工するテントも必須。



小屋が建ったら作業の安全を祈願して飲み方。

大造り物が出来るまで②

材料集め

大造り物には大量の自然の素材が必要で、その材料集めは最も大変な作業のひとつです。自然環境の変化の影響もあり山都町内だけでは材料が集まらず、阿蘇や宮崎、大分、遠くは天草まで材料を集めに行くこともあります。各連合組ごとに、おおまかに材料集めの班と制作班に分かれるなど、役割を分担して効率的に作業を進めます。ただし近年は高齢化、人手不足の影響もあり、お互いの班を手伝うなど柔軟に対応することも多いようです。



杉の枝打ち。高齢者組もベテランの技を發揮。



山に入り、銀杏の木を切って軽トラックで運びます。



杉の枝が大量に必要な時には数人がかりで集めに行きます。



草原に自生する萩。最近では少なくなったか。



採ってきた萩の葉を落とし、乾燥させます。



今や、松ぼっくりは貴重な材料です。



使いやすい部材にするために吊るして乾燥。



木の枝や直径の太いかずらなども、どこにあるかツボを押さえています。



秋の訪れを告げるススキ



木の皮を剥くのはとても大変な作業。



集めてきた材料を作業場で下ごしらえ。



竹は最も使われる材料の一つ。